
紅蓮の竜

水無月 皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅蓮の竜

【NZコード】

N4495Q

【作者名】

水無月 皇月

【あらすじ】

紅蓮の竜のヴェルリスは、ハンターに追いかけられている途中、倒れている少年を見つけた。その少年はヴェルリスのパートナーだつた。少年、バシレウスは闇の力に手を出した者に追われていた。ヴェルリスとバシレウスは、闇の力に立ち向かうため、修行をし、力をつける。

そんな二人が、子供から大人になる話。

「西に逃げたぞー」

男の声が森中に聞えた。
森の中に居た男たちは一斉に西を見た。
その視線の先には、赤い生き物。
その生き物は、ドラゴン。

そのドラゴンの鱗は、日の光を受けて輝いている。
鱗はルビーの様だが、ルビーよりも赤く、紅蓮と言うに相応しい。
ドラゴンの飛んでいる早さはとても速く、とても男たちは追いつけないだろう。

ドラゴンの金色の瞳は、鬼ごっこを楽しむ子供のように爛々と輝いている。

「急げー、見失うな!」

ドラゴンの耳に、男たちの声が届く。

「グルルルル」

「 ドラゴンは喉を鳴らした。

そして、紅蓮の鱗に包まれている翼を先ほどよりも早く動かす。すると、さらに速くなり男たちはすぐに見えなくなつた。しばらく飛んでいると、岩山に赤い物が見えた。

ドラゴンは首を傾げた。

彼が見たことのある赤い物と言えば、生き物以外のものしか見たことなかつた。

興味を持ち、そのものの近くに着地する。

そして目を見張つた。

赤い物体、それは、人間だった。

赤、いや、紅蓮の髪に亞麻色のローブを身にまとつた少年だ。

ドラゴンは、少年の瞳も気になつた。

髪と同じ色か、ドラゴンと同じ金色はたまた、他の色か…。

ドラゴンは顔を近づけ、鼻で少年を突いた。

「うう」

唸り声と共に、少年が動いた。

ドラゴンは、徐々に開く少年の瞳を見た。

ドラゴンは更に驚いた。

少年の瞳はドラゴンと同じ金色。

それは、パートナーの印。

こんなことは珍しく、一万人に一人の確率だ。

「 誰だ、お前？」

少年は、ドラゴンを見てそう言った。

普通なら怖がるが、少年は一切驚かない。

それはドラゴンをむらに驚かした。

ドラゴンはゆっくりと、意識を近づけた。

少年はそれをすんなりと受け入れ、話し始めた。

(もつ一度聞く。お前は誰だ?)

(俺はヴェルリス。)

「ヴェルリス…」

その言葉を口にすると、体中の血が沸き立つた。

(お前の名は?)

ヴェルリスが、大きな頭を傾げた。

紅蓮の鱗がきらりと輝き、少年は美しいと思つた。

「俺は…バシレウスだ。だが、フレイルと呼んでくれ」

ヴェルリスは更に首を傾げた。

(何故だ?)

「追われている身だからだ」

その言葉に、ヴェルリスは、口を細め、顔をバシレウスに近付けた。

(誰に)

バシレウスは言葉を詰まらせ、俯いた。

どのように説明してよいか、悩んでいるのだ。

その間、ヴェルリスは催促せず、気長に待つてくれた。
しばらくすると、バシレウスは顔をあげた。

「闇の力は知っているか?」

バシレウスは重い口を開けた。

(悪魔を召喚し、その悪魔と契約することで得られる力だりつ~・)

バシレウスは頷いた。

「契約の時、差し出すものが良い物であるほど、力は強くなる」

（それがどうかしたか？）

「俺を追つている者は、悪魔に心臓を差し出した」

ヴェルリスは目を大きく見開いた。

「力欲しさにだ」

（だが心臓を捧げたら、悪魔の下僕になるんだろう？）

「ああ。だが奴は、その悪魔を殺した」

ヴェルリスは小さく唸り、目を細めた。
その瞳には、怒りの炎が燃えていた。

（禁術を使った上に、悪魔を殺すとは

「悪魔を殺したせいで奴は、悪魔の力を全て手に入れた」

バシレウスの瞳が、悲しげに揺れた。

「アイツに俺の母さんは殺されたんだ」

そう言つたバシレウスの瞳は、怒りに染まつた。

「俺を愛してはくれなかつたけれど、俺は愛していた」

再び、バシレウスの瞳が悲しみに染まつた。
ヴェルリスはバシレウスの話を黙つて聞いていた。

バシレウスと同じように、ヴェルリスの瞳は悲しげにゆれていた。

「俺を嫌つていたけれど、俺は大好きだつた」

そう言つたバシレウスの瞳には、涙が溢れていた。

ヴェルリスはそんなバシレウスを、優しく、温かい目で見守つた。

「すまない」

落ち着いたバシレウスが、ヴェルリスに言った。

（何がだ？）

ヴェルリスが首を傾げながら言った。

バシレウスは一瞬呆け、すぐに笑みを浮かべた。

「いや、何でもない」

ヴェルリスは更に首を傾げる。

夕日の光を浴びて、紅蓮の鱗が輝く。

バシレウスは、ヴェルリスの仕草に笑みを深めた。

グオオオオオオオオオオ！

と言う鳴き声が、響いた。

地面に座っていたバシレウスは、慌てて立ち上がり、岩山の麓の森に向かつて走り出した。

ヴェルリスもその後に付いて行く。

森に入ると、大きな茂みに身を隠した。

バサツバサツバサリ

と、羽ばたく音が聞え、地面に影が映つた。

空を見ると、緑色の竜が翼を力強く動かしていた。

その竜の爪は金色で、夕日の光を反射してきらりと輝いていた。しばらくすると羽ばたく音も聞こえなくなり、バシレウスとヴェルリスは茂みから出た。

（フレイル、あれは何だ？）

ヴェルリスの質問に、バシレウスは空を見上げながら答えた。

「竜の名前はアルキス。アルキスのライダーがローランだ。あいつ等は追手だ」

ヴェルリスの瞳がきらりと光った。

(悪魔を殺した?)

バシレウスは首を振り、否定した。

「ローランも闇の力に手を出したが、悪魔を殺してはいけない。
悪魔を殺したのはビロンと言つやつだ」

バシレウスがそう言つて、別の声がした。

「フレイル、ビロン様を懲へ言つとは…。ビロン様が刑を和らげ
てやるつとしていたのに…」

バシレウスが顔を歪め、声の主の名前を呼んだ。

「ローラン…」

声の主は緑の髪に、黄色い瞳の青年だ。
青年、ローランは眉をひそめた。

「なんだい、その口の利き方は。昔みたいに呼んでくれよ、フレ
イル

バシレウスは鼻を鳴らしてローランを笑った。

「お前のような奴に、敬語を使う必要などないよ」

ローランは怒りに顔を歪めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4495q/>

紅蓮の竜

2011年10月7日00時29分発行